インドネシア・東スンバ県 パフンガ・ロドゥ郡の 村落社会における世帯と経済

小　池　　誠

は じ め に

本報告は，2011年 8 ～ 9 月に特定個人研究費「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」により実施したインドネシアの東スンバ県における調査の成果[1] を報告するものである。2010年のスンバ調査は，東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県ハハル郡（Kecamatan Haharu, Kabupaten Sumba Timur, Propinsi Nusa Tenggara Timur）の二つの行政村カダハン村（Desa Kadahang）とウンガ村（Desa Wunga）を対象としたが［小池 2012］，今回の調査はおもにパフンガ・ロドゥ郡（Kecamatan Pahunga Lodu, Kabupaten Sumba Timur のカムトゥック村（Desa Kamutuk)[2] で実施した。筆者のスンバ調査は1985年以来ハハル郡で行われてきた［小池 2005 参照］。宗教とエスニシティ，農業（水田耕作）などの点でハハル郡とは対照的な東スンバ県東部のパフンガ・ロドゥ郡で実施したことに，今回の調査の意義がある。ハハル郡との比較研究を進める上で必要となる人類学的データを収集することが調査の主要な目的であった。対照的な二つの地域社会において，世帯と経済に関してどのような差異を認められるか明らかにしたい。また，家内的領域（domestic domain）における経済の問題を考える上で忘れてはいけない，公的領域（public domain）にある氏族（clan）と「家」（house）と，家内的領域にある世帯との関係を考えていきたい[3]。

1）2010年度以来のインドネシア調査は，本学の特定個人研究費とともに，平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」（課題番号：22520837）の援助も受けて実施された。インドネシアの現地調査に関しては，インドネシア科学院（LIPI）のパチ氏（Abdul Rachman Patji）の協力を得て，インドネシア政府調査技術局（RISTEK）の調査許可を取得した。また，ワインガプにあるウィラ・ワチャナ・キリスト教高等経済学校（STIE）の協力を得て，東スンバ県における調査を実施した。今回のインドネシア調査に協力をいただいた関係諸氏・諸機関に感謝の意を表したい。

2）カムトゥック村は仮名である。同じ村を調査して博論を書いたアルゴ・トゥィクロモ（Argo Twikromo）［Twikromo 2008］が使用した仮名を本稿でも採用している。

3）スンバにおける公的領域と家内的領域については小池［2012：29-31，2013：10］ですでに論じている。

キーワード：文化人類学，インドネシア，スンバ，世帯，経済

１　パフンガ・ロドゥ郡とカムトゥック村

１－１　歴史的・地理的概観

パフンガ・ロドゥ郡は一般的にはマンギリ（Mangili）と呼ばれる地域であるが，これはかつて存在した中核村マンギリ（Paraingu Mangili）[4] に由来している。マンギリ出身の郷土史家であるカピタ（Umbu Hina Kapita）が紹介している伝承によると，マル（Màru）氏族とその仲間の氏族がイネとダイズの栽培にふさわしい場所を求めて転々と移動した後，マンギリに到達した。そこでイネとダイズの種を蒔くと，作物が実った。しかし，その土地にはすでに別の氏族が住んでいたので，闘いが勃発し，マル氏族が先住の氏族を追い払って，その土地に定住した。マル氏族とその仲間の氏族を合わせて，“Màru－Watubulu, Matolangu－Wanggirara” という４氏族がマンギリの支配者となった[5]［Kapita 1976b: 22-23］。上記の４氏族とその他の氏族から構成される中核村マンギリは，1985年以来，筆者が調査を続けてきた中核村ウンガ（Parai Wunga）や他の地方の中核村と同様に，平地ではなく高台の上に位置していた。19世紀中にマトーラング氏族（kabihu Matolongu）はその他の氏族とともに中核村を離れて，水田に隣接する地域に移住してカムトゥック集落を築いた［Twikromo 2008］。この集落は，スンバにおける村落のヒエラルキーでは中核村の下位に位置づけられる分村（*kotaku*）[6] である。中核村マンギリはすでに長く放棄され，今日は墓の跡が残っているだけである[7]。

オランダ統治時代の20世紀初頭に，マンギリは西隣のリンディとともにリンディ・マンギリ（Rindi-Mangili）という自治領を構成し，リンディの自治領首長（ラジャ）の下に置かれた［Kapita 1976a: 51-54］。インドネシア独立後，マンギリを含む郡（kecamatan）の名称としてパフンガ・ロドゥ（Pahunga Lodu）が用いられるようになった。この名称は「太陽の昇る所」という意味で，東スンバ県の東部に位置することに由来する。1965年の行政区分では，パフンガ・ロドゥ郡は東スンバ県の４つの郡の１つで，現在のウマルル郡からワイジェル郡まで含む広い領域であった。その後，県の行政区分は何度か変化し，2007年から東スンバ県における郡の数が増えて22となり，現在のように８つの行政村（desa）から成るパフンガ・ロドゥ郡ができた［Woha 2008: 266-270］。

ハハル郡と比較しながらパフンガ・ロドゥ郡の地理的特徴をまとめよう。表１から明らかなように，パフンガ・ロドゥ郡はハハル郡と比べて，面積は狭いが，人口が多い。つまり，人口密度が3.5倍も多いのである。東スンバ県において農業が経済の中心であるので，水田

4）中核村とは政治的な領域の中心となる集村である。詳細は小池［2005: 49］を参照。
5）中核村ごとに，その中心となる４つの氏族が決まっている。たとえば，中核村ウンガでは，“Pahoka－Tula Paraingu, Haru Kondu－Ana Lingu” となる。
6）本稿では，スンバ語の普通名詞のみイタリックで表記している。
7）カピタがパフンガ・ロドゥの氏族に関するスンバ語の伝承を集めた本［Kapita 1979: 83］には，中核村マンギリの地図が掲載されていて，建っていた家屋の名称が記されている。

面積の違いはそのまま二つの郡の経済的豊かさの違いを示し，同時に支えることができる人口規模の違いも表している。マンギリにはオランダによる統治が始まる前に，土着的な灌漑システムがあり［オンフレー 1987］，さらにオランダ植民地期にも灌漑が整備され，東スンバ県のなかで水田耕作の点で先進的な地域となっていた。パフンガ・ロドゥ郡は，降水量が少なく乾燥し，農耕が困難な土地が広がり，経済的に後進地域であるハハル郡とはまったく対照的な地域である。

表１　パフンガ・ロドゥ郡とハハル郡の概況（2010年）

	パフンガ・ロドゥ郡	ハハル郡	東スンバ県全体
面積（km²）	349.8	601.5	7000.5
人口（人）	12,071	5,852	231,393
人口密度（人／km²）	35	10	33
行政村	8	7	140
水田（ha）	2,979	157	12,752

［Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011a: 39, 113, 204］

表２　パフンガ・ロドゥ郡とハハル郡の宗教別人口（2010年）

	イスラーム	カトリック	プロテスタント	ヒンドゥー／仏教	その他の信仰（マラプ教）	合計
パフンガ・ロドゥ郡	456 3.8%	1,403 11.6%	9,545 79.1%	3 0.0%	661 5.5%	12,068 100%
ハハル郡	56 1.0%	314 5.4%	2,795 47.8%	4 0.0%	2,683 45.8%	5,852 100%
東スンバ県全体	14,305 6.2%	19,630 8.5%	167,904 73.0%	487 0.2%	27,610 12.0%	229,936 100%

［Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011a: 198］

マンギリは20世紀前半におけるオランダ人との関係という点でも先進的な地域であった。それは灌漑の整備だけでなく，また先に取り上げたカピタという郷土史家の存在にも表れている。スンバの歴史と文化について多くの本［たとえば Kapita 1976a, 1976b, 1979. 1982］を書いたカピタは，植民地期にオランダ人学者オンフレー（L. Onvlee）の下で助手として働き，スンバ語（正確には県庁所在地であるワインガプを含む地域で使用されるカンベラ語）とオランダ語の辞書編纂［Onvlee 1984］にも協力している。そのようなオランダ人との結びつきは，キリスト教の布教という点でも顕著である。表２から明らかなように，ハハル郡と比べてパフンガ・ロドゥ郡では，カトリックとプロテスタントを合わせたキリスト教徒の割合が高く，土着宗教の信者（統計書には「その他の信仰（マラプ）」と書かれている）の割合が圧倒的に低いのである。これは近年の現象ではなく，上記のような植民地期以降の歴史的経緯と関係するパフンガ・ロドゥ郡の特徴である。また，イスラーム教徒の割合も3.8

％と，東スンバ県のなかでは高いほうである。この背景については，カムトゥック村の概観とも合わせて，次に取り上げる。

１－２　カムトゥック村の概要

カムトゥック村の助役（Sekdes）の話によると，村の人口は約3,600人，世帯（KK）数は約860である。村の面積はハハル郡のカダハン村とウンガ村を合わせたものとほぼ等しいが，人口規模は両村の合計よりも２倍以上も大きい。もともと村内に水田が広がり経済的にも豊かで，人口が多いだけでなく，村外から移入する住民もあり，このような人口規模になったのである。

この村の特異な点は，政府の推進するトランスミグレーション計画に従ってジャワ島から来たイスラーム教徒の移民を受け入れていることである。1982年にジャワ島から６世帯（KK）がカムトゥック村にやって来た。そのうち，１世帯は全員がジャワに戻ったが，それ以外の５世帯はカムトゥック村に残り（成員の一部はジャワに戻った），水田耕作に従事している。また，地元のスンバ人との通婚関係もあり（結婚に伴い，ジャワ女性がキリスト教に改宗したケースも，スンバ男性がイスラームに改宗したケースもある），良好な関係が築かれている。また，ジャワ人よりも以前にやって来て，そしてはるかに多くこの村に居住している民族集団がサブ人（Orang Sabu）である[8]。次章で取り上げる世帯調査には，スンバ人だけでなく，ジャワ人とサブ人も調査対象に含まれていて，ハハル郡の調査村とはまったく異なるカムトゥック村の民族的多様性が示されている。

カムトゥックは行政村全体の名称であると同時に，慣習家屋と墓が集まった分村（*kotaku*）の名称でもある。慣習家屋といっても，中核村ウンガにある家屋とは違って，チガヤ葺きではなくトタン屋根の家屋であり，家屋の構造と使用している建材も，スンバの伝統的様式ではない。集落には２列を成して，合計10棟の慣習家屋が建っている。これらの家屋はマトーラング氏族（kabihu Matolangu）とカナタング氏族（kabihu Kanatangu）に属する。前節ですでに述べたように，マトーラング氏族は伝承にも登場する支配的氏族の一つである。もう一つのカナタング氏族は，後来の氏族であり，最初はマトーラング氏族の妻の受け手として，この地方に定着したと語られている［Twikromo 2008: 58-59］。マトーラング氏族は，＜ジャンガ・ウクの家＞（Uma Jangga Wuku）と＜カルキの家＞（Uma Kaluki）に分かれる。一方，カナタング氏族は，＜アンドゥングの家＞（Uma Andungu）と＜ランディの家＞（Uma Randi），＜白い家＞（Uma Bara）に分かれる[9]。これらの「家」（*uma*）は，集落に建っ

8）サブ人はプロテスタントの信者である。県の統計局が出している統計からは，民族集団ごとの人口数は分からない。

9）カピタが描いた中核村マンギリの地図［Kapita 1979: 83-85］には，マトーラング氏族の６棟の家屋が記されていて，そのなかには Uma Andungu と Uma Jangga Kawuku（Uma Jangga Wuku と同じ家屋），Uma Kaluki の名前がある。ちなみに，カナタング氏族の家屋については記載されていない。これは，中核村マンギリが放棄された後，カナタング氏族がカムトゥックに到来したことを示している。

写真１　カムトゥック村のトタン屋根の慣習家屋と墓石

ている具体的な家屋を指すと同時に，その家屋を統合の核とする氏族の下位単位を指している。すなわち，マトーラング氏族は二つの親族集団から，カナタング氏族は三つの親族集団から構成されることになる。もともと「家」というのは，中核村（*paraingu*）に建つ「マラプの家」（*uma marapu*）という家屋を儀礼の場としてもつ親族集団である。カムトゥックは中核村ではなく，またそれぞれの氏族の成員の多くはキリスト教かイスラームに改宗し，マラプ（祖先）に対する祭祀を行っていないので，カムトゥックの「家」は「マラプの家」とは呼べなくなっている。しかし，親族集団としての氏族と「家」との関係については，カムトゥックと中核村ウンガの間に相違はないと考えられる［小池 2005: 110-114, 2012: 29］。

カムトゥックが東スンバ県の他の地域と違う点は，イスラームに改宗したスンバ人が数多く存在することである。1952年にカナタング氏族の＜アンドゥングの家＞の指導者がムスリム女性と結婚し，それを契機にして，マラプ信仰を続けた数人を除いて，この「家」の成員がほぼそのままイスラームに改宗したという［Twikromo 2008: 63］。そのため，スンバの農村部には珍しく，大きなモスクがカムトゥックに建っている。支配的氏族の内部においてヒエラルキーが強く，そのため＜アンドゥングの家＞の集団的改宗が起きたと考えられる。これと近いケースが，マトーラング氏族の＜カルキの家＞とカナタング氏族の＜白い家＞でも起きている。プロテスタントの牧師との争いを契機として，＜カルキの家＞と＜白い家＞の成員の一部がカトリックに改宗した［Ibid.］。

2　カムトゥックにおける世帯調査

世帯調査は，2010年11月にハハル郡のカダハン村とウンガ村で実施した質問票と手法［小池 2012 参照］をほぼ踏襲し，ワインガプにあるウィラ・ワチャナ・キリスト教高等経済学校（STIE）の協力の下で2011年８～９月に行われた[10]。カムトゥック村は５つの地区（dusun）に分かれ，それぞれの地区は４つの隣組（Rukun Tetangga＝RT）から構成されている[11]。そのため，当初は，前回の世帯調査と同様に合計100世帯を調査対象とするため，機械的に各隣組から５世帯，つまり各地区から20世帯ずつ世帯を抽出しようと考えた。しかし，一つの地区は交通の便が悪いため，11世帯しか調査を行うことができなくなった。その分は，ある程度，人口比に合わせて他の地区で調査対象となる世帯を増やして，目標の100世帯のデータを集めることができた。なお，データの偏りがないように，各隣組からランダムに抽出した世帯の世帯主（原則として男性）を対象として，質問票を使った調査を実施した。世帯主が不在の時には，その妻がインフォーマントになっている。

質問票はインドネシア語で作成され，必要に応じてスンバ人の調査助手がスンバ語で説明して世帯調査を進めた。前年の調査結果と比較可能にするため，調査項目の修正は最低限に止めた。質問票は2部構成になっていて，第一部では，世帯構成員（他出者も含め）の住所・年齢・出生地・結婚時の年齢・民族集団・宗教・氏族（*kabihu*）・職業・最終学歴などを問い，第二部では，住居（広さ・土地所有など），農地の所有状況，収穫物，飼育する家畜，所有する電化製品（テレビ・携帯電話など）とバイク，農業以外の収入，項目ごとの支出額，緊急時の対応など，各世帯の経済状況の概要を把握できるような質問票の作成に努めた。

3　世帯調査の結果

３－１　世帯主の概要

一般的に世帯主は男性が務めるものとみなされている。夫と死別または離別した場合は，妻が世帯主となる。調査対象の100世帯のうち，女性の世帯主は12人である。世帯主全体の平均年齢は50.4歳である。世帯主の民族集団と宗教の構成は表３に示している（比較のためにハハル郡の２村のデータも掲載）。調査対象の約３分の１と，サブ人の割合が高いのがカムトゥック村の特徴である。サブ人はもともとスンバ島の東に位置するサブ島とライジュア島に住む民族集団で，おもにオランダ統治時代にスンバ島に移住した［Fox 1977 参照］。県庁所在地ワインガプと東スンバ県の北岸地域にサブ人の集落がひろがっている。カムトゥッ

10）調査の実施に際しては，ウィラ・ワチャナ・キリスト教高等経済学校の副学長 Umbu Ho Ara 氏と，カムトゥック村出身で NGO の代表を務める Stepanus Makambombu 氏の協力が得られた。調査助手（５人）とデータ入力助手（２人）は，前回の世帯調査の経験者をそのまま採用した。また，カムトゥック村の助役である Matius Tata Ewang 氏から調査の便宜を図ってもらった。この他，名前を一人一人挙げることはできないが，カムトゥック村での調査に関わった関係諸氏に感謝の意を表したい。

11）地区（dusun）と隣組（RT）という単位は，行政村の下位単位としてインドネシア全土でほぼ共通するものである。

ク村では，カムトゥック集落周辺と幹線道路沿いに比較的に裕福なサブ人が住んでいて，村の海岸部には漁業などに従事する貧しいサブ人が数多く居住している。カムトゥック村の５地区すべてを調査対象として，一つの村の全容を把握することを目的としたため，サブ人が多数を占める地区も調査対象に含まれている。調査対象のなかにはフローレス島のマウメレ生まれの人（世帯60）がいる。この村のサブ女性と結婚し，今は漁業で生活を立てている。カムトゥック村の宗教構成もハハル郡よりも多様性に富んでいる。11人のイスラーム教徒には，イスラームに改宗したスンバ人とジャワ島からの移民の双方が含まれている。調査対象のなかに，カトリック教徒が18人もいる。すでに述べたように，東スンバ県のなかでは，カムトゥック村はカトリックの割合が高い（東スンバ県の人口の8.5％）。

表３　世帯主の民族集団と宗教（カムトゥック村とハハル郡）

	スンバ人	サブ人	ジャワ人	マウメレ出身	プロテスタント	カトリック	イスラーム	マラプ教	不明
カムトゥック村（100人）	62	35	2	1	65	18	11	5	1
ハハル郡（２村100人）	99	1	0	0	31	1	1	67	0

表４　世帯主の最終学歴

	未就学	小学校中退	小学校卒	中学校中退	中学校卒	高校中退	高校卒	大学中退
カムトゥック村（100人）	4	41	32	8	3	3	8	1

表５　世帯主の職業（民族集団別）

	農民	漁民	自営業	公務員	合計
スンバ人	59	1	1	1	62
サブ人	31	3	1	0	35
その他	2	1	0	0	3
合計	92	5	2	1	100

世帯主の最終学歴をみてみよう（表４参照）。世帯主の平均就学年数[12]は5.65年である。インドネシアでは年齢と最終学歴との間には相関関係が認められる[13]。20～30歳の男性では，中学校または高校卒業が当たり前になっているが，平均年齢が50.4歳の世帯主の間では，高校卒業以上は稀で（９人のみ），小学校卒業の学歴でも国語であるインドネシア語の読み書きができて，十分だとみなされていた。一方，「未就学」（カムトゥック村で４人），つまり一度も学校に行ったことがない高齢者は，インドネシア語ができず，地方語であるスンバ語

12）インドネシアでは，日本と同様に 6-3-3 制である。
13）筆者が1999年にジョクジャカルタ特別区バントゥル県の一農村で調査した結果からも，年齢との相関が明らかになる［小池 2003：26-30 参照］。

しか話せない人々である。

表５から分かるように，世帯主の多くは農民である。ただし，水田耕作や畑作だけでなく，次章で紹介するように馬・水牛・豚などの家畜も飼養している。海岸部に住む住民，とくにサブ人には漁業をおもな生業とする住民が３人いる。自営業が２人いるが，そのうちの１人は女性の世帯主で，絣織で生計を立てている。東スンバ県全体で，経糸を括って染め，腰機で織りあげる経絣が有名であるが［小池 1998：100-104］，このカムトゥック村でも独自の染料を使った布が織られている。

３－２　世帯構成

世帯の平均構成員数は6.38人である。ハハル郡の調査では，カダハン村で6.58人，ウンガ村で6.50人であったので，両村と比べてやや少ないだけである。カムトゥック村の世帯構成を表６で示している。核家族型と直系家族型という世帯構成の他に，複合家族型の世帯構成が全体の７％を占めている。直系家族は一世代一夫婦の原則で核家族が縦に結合している家族である。直系家族に含めることができない，複数の核家族が結合している家族を本稿では複合家族と呼んでいる［小池 2012 参照］。たとえば，兄夫婦と弟夫婦が親とともに一つの世帯を構成していれば，それは複合家族型世帯になる。また，世帯主と親族関係にない成員とその妻と子どもを含むような世帯も，複合家族型に分類される。一般的には上記の３類型が分類に使用されるが，本稿では付帯成員の有無という基準を追加している。付帯成員というのは，一般的にいえば上記の類型に含むことができない世帯構成員のことを指している[14)]。付帯成員の例としては，世帯主の上位世代の親族（たとえば妻と死別した高齢の兄など）もあるが，スンバでとくに多いのは，別居している息子か娘の子どもなど「孫」に当たる親族を世帯主夫婦が引き取って養育しているケースである。

表６をみると，ハハル郡の調査では，核家族型・直系家族型・複合家族型がそれぞれ54％，32％，14％であったので，カムトゥック村では核家族型の割合が少し高いようにみえる。しかし，100世帯のなかからサブ人世帯などを除いて，スンバ人世帯（62世帯）のみを抜き出して集計してみると，核家族型の割合は63％から59.7％に下がり，ハハル郡のデータに近付

表６　世帯構成（カムトゥック村とハハル郡）

	核家族型	直系家族型	複合家族型	小計
付帯成員なし	47	16	4	67
付帯成員あり	16	14	3	33
合計	63	30	7	100
ハハル郡２村	54	32	14	100

14）スンバの家族／世帯における付帯成員については，小池［2013］で詳しく論じている。

表７　カムトゥック村の世帯構成（民族集団別）

	核家族型	直系家族型	複合家族型	小計
付帯成員なし	26 41.9%	7 11.3%	3 4.8%	36 58.1%
付帯成員あり	11 17.7%	12 19.4%	3 4.8%	26 41.9%
スンバ人世帯の合計	37 59.7%	19 30.6%	6 9.7%	62 100%
サブ人世帯の合計	24 68.6%	10 28.6%	1 2.9%	35 100%

く。サブ人世帯（35世帯）では，平均世帯構成員は5.43人で，核家族型世帯の割合が68.6%になるので，スンバ人世帯とサブ人世帯では世帯規模と構成について差異が認められる。ただし，これがスンバ人とサブ人の家族／世帯に関する規範の違いによるとは一概に結論できず，世帯が属する階層とその経済規模の違いも考慮すべき点である。

4　世帯と経済

調査対象世帯の家屋についてみていこう。インドネシアにおいて家屋の水準を示す指標として屋根と壁，床の材料が注目される。たとえば屋根の材料がトタン，瓦，ロンタルヤシ，チガヤかで区別され，チガヤなどの植物性の材料を使うよりもトタン屋根のほうが高い威信を示すことになる。表８には，屋根の材料による家屋の分類と，家屋面積の平均を記載している。ハハル郡の調査結果と比べて，カムトゥック村では茅葺き屋根の割合が低く，トタン屋根が広く普及していることが分かる。また，ハハル郡の調査結果にはなかったロンタルを使った屋根が10棟存在する。このような屋根は貧しいサブ人世帯の家屋にみられる特徴である。一方，家屋面積については 60 m² 前後で，カムトゥック村とハハル郡でそれほど大きな違いはない。

農地の所有と小作についてみていこう（表９・表10参照）。農地の所有面積と規模について，カムトゥック村とハハル郡でほとんど違いがない。大きな違いが認められるのは，水田

表８　家屋の種類と広さ（カムトゥック村とハハル郡）

	トタン屋根の家屋	茅葺き家屋	ロンタル葺き家屋	家屋面積の平均*1 (m²)
カムトゥック村 （100世帯）	83	7	10	61.79
ハハル郡２村 （100世帯）	30	70	0	58.79

*1：カムトゥック村の家屋面積が不明な１世帯を除いて集計。

表９　農地の所有面積（カムトゥック村とハハル郡）

	農地の所有世帯（世帯）	農地の所有面積（ha）	水田の所有世帯（世帯）	水田の所有面積（ha）
カムトゥック村（100世帯）	81	平均　1.15 最小　0.25 最大　4.50	70	平均　0.87 最小　0.25 最大　3.00
ハハル郡２村（99世帯）*1	99	平均　1.01 最小　0.20 最大　10.00	0	

*1：農地面積が不明な一人を除いて集計

表10　農地所有と小作

	農地を所有する世帯（81世帯）	農地を所有しない世帯（19世帯）	小計（世帯）
小作	27	9	36
分益小作	2	4	6
合計	29	13	42

の有無だけでなく，農地を所有していない世帯が19世帯も存在することである。もちろん，そのなかには農業に従事していない世帯も含まれるが，小作または分益小作という形で農地を借りて農業に従事している世帯がカムトゥック村には存在する。これは，川沿いの土地（*mondu*）を除けば，畑作地として耕作可能な土地がまだ十分にあるハハル郡の調査村ではみられない農業経営の方法である。小作とは地代を払って農地を借りることで，一方，分益小作（bagi hasil）とは，取り決めに従い，収穫物を土地の所有者と小作との間で分けるやり方である。分益小作の一例（世帯番号014）では，0.25ヘクタールの水田を借りて耕作し，１回に500 kgの米が収穫でき，そのうちの150 kgを水田の所有者に渡している（カムトゥックでは年２回の収穫が可能）。表10から分かるように，農地を所有する81世帯のなかの29世帯が，また農地を所有していない19世帯（このなかには全く農業に従事していない世帯も含まれる）のなかの13世帯が小作または分益小作を行っている。

水田耕作が可能なカムトゥック村では，水田の有無と，その所有面積の違いによって，農業収入に大きな格差が生まれてくる。この点が，水田耕作ができず，おもにトウモロコシの収穫のみに依存しているハハル郡の調査村との大きな違いである。

スンバでは一般的にいって農業と家畜飼養が生業の中心である。スンバ人にとって家畜は市場経済だけでなく縁組関係にもとづく交換で使われるので，とても重要な意味をもっている。馬（ときには水牛も）は結婚にさいして婚資として妻の受け手（夫側）が妻の与え手（妻側）に贈るものであり，豚はその反対に妻の与え手が妻の受け手に贈る家畜である。また，客を迎えた時には鶏を食用に供する。上記の家畜に対して，牛と山羊はもっぱら現金が

表11　家畜の所有（カムトゥック村とハハル郡）

	馬	水牛	牛	豚	山羊	鶏
カムトゥック村 所有世帯 （100世帯）	18	11	29	65	34	77
最多所有数	25	40	20	14	16	50
最小所有数	1	1	1	1	1	1
平均所有数 （全世帯）	1.01	0.71	1.26	1.84	1.36	7.02
ハハル郡２村 所有世帯（100世帯）	26	4	49	93	57	98
ハハル郡２村 平均所有数（全世帯）	0.54	0.12	1.09	2.76	2.49	7.96

表12　消費財の所有（カムトゥック村とハハル郡）

	冷蔵庫	テレビ	パラボアアンテナ	VCD プレイヤー	パソコン	携帯電話	バイク	自動車
カムトゥック村 （100世帯）	4	28	25	15	3	65	45	2
ハハル郡２村 （100世帯）	0	4	1	3	0	41	22	0

必要な時に売却される家畜である。このように家畜はスンバ人にとって儀礼的かつ経済的に価値あるものであるが，カムトゥック村では，豚と鶏を除けば，家畜を飼っている世帯の割合はそれほど高くない。ハハル郡の調査村と比べると，家畜を飼っている世帯の割合の違いは明らかである。水牛以外の家畜は，ハハル郡のほうが飼っている世帯の割合が高い。とくに豚と鶏はハハル郡のどの世帯でも飼養していて当たり前であるが，カムトゥック村ではそれぞれ65％と77％と，それほど高くなっていない。またカムトゥック村の特徴は，とくに馬と水牛，牛という大型家畜の所有が，２世帯に集中していることである。たとえば，スンバ人世帯（世帯番号032）は馬16頭，水牛40頭，牛６頭を所有している。ハハル郡カダハン村にも，例外的に多くの家畜を所有する世帯（世帯番号247）があるが，その世帯でも馬10頭，水牛８頭，牛10頭である。やはり，カムトゥック村に際立って裕福な世帯がいくつか存在することは明白である。

カムトゥック村とハハル郡の調査村との経済的な差異は，消費財の所有からも明白である（表12参照）。ハハル郡の調査村と違って，カムトゥック村では電気がすでに引かれているので，テレビなどの電化製品の普及度が違うのは当たり前といえる。しかし，バイクを所有する世帯がハハルよりも２倍以上も多く45％に達しているのは，カムトゥック村の豊かさを

示す指標である。また，衛星放送を受信するためのパラボラアンテナ[15]を所有する世帯が25％もあり，さらに冷蔵庫と，パソコン，自動車を所有する世帯が少ないながらも存在するというのは，東スンバ県の農村部としてはとても珍しいことである。自動車を所有している世帯（世帯番号051）は，冷蔵庫とバイクを３台ももっている。世帯主が耕作している水田の面積は0.5ヘクタールと，それほど広くないが，妻が地元の水道公社（PDAM）で働いているので，このように都市的な消費財の所有が可能になったと考えられる。

5　ケーススタディからみえてくる貧富の格差

この章では，カムトゥック村の世帯構成と経済状況との関係を考えるために，４世帯を取り上げ，住居，職業，農地所有，世帯員の学歴，消費財の所有などを詳細に検討したい。

①　裕福なスンバ人世帯（世帯番号030）

サイード（仮名）は，カナタング氏族の＜アンドゥングの家＞に属するイスラーム教徒である。この世帯は「貴族層」[16]に属する。すでに述べたような経緯で，この「家」の成員はイスラーム教徒が多いのである。この家族の名前は，全員，男性が「Bin（～の息子）」，女性が「Binti（～の娘）」を個人名の後ろに付けている。この世帯にいる４人の児童が通っているのは，カムトゥック村にある MIS Al. Jihad（MIS は Madrasah Ibtidaiyah Swasta の略）という名前の私立のイスラーム小学校（マドラサ）である。キリスト教徒が多数派であるカムトゥック村において，ムスリムであることにこだわっている父親の教育方針が表れている。

住居は，面積が84 m^2で，レンガ造りでトタン屋根とタイル張りという東スンバ県の基準では高価な造りの家屋である。1.5ヘクタールの水田と1.0ヘクタールの畑作地を所有している。水田からは，年間12トン（市場価格で約7,200万ルピア＝約72万円）[17]の米を収穫できる。また，畑ではおもにトウモロコシを栽培している。また，副業として海藻[18]の採集で月に100万ルピア（約１万円）の収入を得ている。この世帯の裕福さは，馬25頭，水牛５頭，牛20頭という飼養している家畜の頭数に表れている。また，消費財についても，パラボラ・アンテナをもち，さらにバイクを５台も所有している（そのうち３台は新品を購入）。この世帯の経済的豊かさは，世帯主の子どもの学歴にも反映している（表13参照）。５人の子どものなかの２人は高校を卒業し，とくに長女は，スンバ島ではなくティモール島のクパン（東ヌサ・トゥンガラ州の州都）にある高校を出ている。ちなみに，この２人の娘の就職に，

15）スンバ島では地上波だけだと受信できるテレビ局が非常に限られているので，裕福な世帯はパラボラアンテナを購入し，首都ジャカルタで受信可能な多くのテレビ局の番組を観ることができるようにしている。
16）スンバ社会は，もともと貴族層（*maràmba*）・平民層（*tou kabihu*）・奴隷層（*ata*）という３つの階層に分かれていた。貴族層の氏族が奴隷を抱えていた。このような階層制が多少は変容していても，現代でも続いている。奴隷については，後で取りあげる。
17）レートは変動しているが，本稿では100ルピア（IR）を１円で計算している。
18）寒天の材料となる海藻で，業者に売って現金収入を得る。

世帯主である父親が有する親族ネットワークなどの縁故が関係している可能性がある。

この世帯構成は，表6の表でいえば，下位世代の付帯成員を含む直系家族型である。この構成には，スンバによくみられる世帯の特徴がよく表れている。ワインガプに住む長女は2001年に挙式は済ませているが，まだ慣習法に従った婚資の交換を済ませていない。そのため，世帯主夫婦が養育している3人の孫は，慣習法上は世帯主の氏族に属することになる。また，同居している長男は2004年に結婚したが，妻は同居していない。スンバ社会では，妻の受け手（夫側）と妻の与え手（妻側）の間の交換をすべて済ませ（その結果，生まれた子どもは夫側の氏族に帰属する），そして夫婦が一緒に生活するようになるまで，いくつかの段階を経ている。

この世帯の構成のもう一つの特徴は，「奴隷」の孫を養育していることである。「奴隷」（*ata*）はスンバ語で「家の子」（*ana kuru uma*）とも呼ばれるが，調査時ではインドネシア語の「家のなかの人」（orang dalam rumah）という婉曲的な表現がよく用いられる。世帯主と同世代の「奴隷」が別の家屋に住んでいて，その孫を養育しているのである。はっきりしたことは世帯調査からは明らかになっていないが，同居していない「奴隷」がこの世帯の水田耕作を手伝っていると考えられる。「奴隷」は主人が属する氏族の成員として数えられるが，氏族の祖先（マラプ）の正当な子孫とみなされることがない社会的存在である［小池2005：53-55，2012：30参照］。インドネシア独立以前のスンバ社会では，主人が「奴隷」に対する生殺与奪の権利をもっていたが，今日ではもちろん，そのように過酷な境遇にはない。「奴隷」が主人の元を離れ，自立しようと願えば自立できる。ただし，主人の庇護下にある時は，主人のために様々な労働力を提供しなくてはいけない。また「奴隷」の娘が結婚する時，その婚資（男財）を受取るのは，実の親ではなく，その主人である。

表13　サイードの家族／世帯構成（世帯番号030）

続柄	年齢	住所	結婚	最終学歴	職業
本人（サイード）	59	同居	既婚	小学校卒	農民
妻	53	同居	既婚	小学校卒	農民
長女	38	別居（ワインガプ）	既婚	高校卒（クパン）	水道公社勤務
長男	36	同居	既婚	中学卒	農民
二男	33	同居	未婚	高校卒（ワインガプ）	農民
二女	31	別居（郡内）	未婚	短大卒（ジョクジャカルタ）	公務員（高校）
孫（長女の娘）	7	同居	未婚	マドラサ在学	
孫（長女の息子）	6	同居	未婚	マドラサ在学	
孫（長女の息子）	2	同居	未婚		
「家の子」の孫	8	同居	未婚	マドラサ在学	

表14　トゥングの家族／世帯構成（世帯番号072）

続柄	年齢	住所	結婚	最終学歴	職業
世帯主（トゥング）	55	同居	既婚	小学校卒	農民
妻	53	同居	既婚	未就学	農民
長女	30	同居	既婚	小学校中退	農民
長女の夫	29	同居	既婚	小学校中退	農民
孫（長女の息子）	7	同居	未婚	小学校在学	

②　農地を所有しないスンバ人の世帯（世帯番号072）

表14で示したスンバ人トゥング（仮名）の世帯は，サイードの世帯のように富裕層とはいえないが，貧困層にも属さない程度の経済水準に位置づけられる。住んでいる住居は，面積が 35 m^2 と狭く，レンガ造りでトタン屋根だが，床はタイル張りよりも安価なセメントを使用している。農地を所有しないので，0.5ヘクタールの水田を借りて耕作し，年間約 4 トンの米を収穫している。同居している娘の夫が世帯主の農作業を手伝っている。水田を所有していないが，馬 2 頭，水牛 1 頭，牛 2 頭，豚 8 頭を飼っているので，家畜の頭数の点では，比較的多いほうである。その結果，テレビをもっていないが，バイクを 2 台所有できる程度の収入を得ている。

世帯構成は付帯成員を含まない，シンプルな直系家族型である。長女の学歴が小学校中退という点で，すでに取り上げたサイードの世帯とは大きな格差が認められる。

③　貧困層のサブ人の世帯（世帯番号097）

最後に，調査対象世帯の約 3 分の 1 を占めるサブ人の世帯を取り上げよう（表15参照）。夫が死亡したので，ヘナ（仮名）というサブ女性が世帯主になっている。この世帯は，カムトゥック村のなかでは貧困層に属するといえる。住居は面積が 48 m^2 と狭く，トタン屋根を使っているが，壁も床も木材（おもに竹）が使用され簡素な造りの家屋である。0.25ヘクタールの畑作地しかなく，そこでトウモロコシや，豆類，野菜を栽培し，それを売って現金収入を得ている。息子が同居しているが，母親一人で畑仕事をしている。また，母親は海藻採集の手伝いをして，月に20万ルピア程度の（約2000円）収入を得ている。この世帯の貧困度は，表12に掲げた品目のなかで，携帯電話しか所有していないという点によく表れている。それ以外では，自転車を 1 台もっている。

現在の世帯の構成は，子ども 5 人と暮らしている。ワインガプの実業系高校を卒業した長女は，ワインガプにあるレストランで働いている。一見したところ，とくに不思議はないような家族であるが，実は複雑な背景がある。長女と長男は，1997年に結婚し，後に死別した夫の子ではない。婚姻関係にない男性との間にできた子であり，次女以下が正式に結婚した夫の子なのである。このように夫＝父親という役割が存在せず，女性が一人で子どもを産み

表15　ヘレの家族／世帯構成（世帯番号097）

続柄	年齢	住所	結婚	最終学歴	職業
世帯主（女性）	45	同居	死別	小学校中退	農民
長女	24	別居（ワインガプ）	未婚	高校卒（ワインガプ）	レストラン勤務
長男	20	同居	未婚	小学校中退	無職
二女	14	同居	未婚	中学校在学	
三女	12	同居	未婚	小学校在学	
二男	9	同居	未婚	小学校在学	
三男	7	同居	未婚	小学校在学	

育てる家族は母中心的家族（matrifocal family）と呼ばれる。このようなタイプの家族が，カリブ海の下層民の間などで報告されているが［清水 1987：6-8 参照］，スンバでは貧困層のサブ人に認められる家族の類型である。

お　わ　り　に

2010年に調査したハハル郡の 2 村の調査結果と比較しながら，カムトゥック村の世帯調査の概要を報告した。ここでまず指摘したいのは，東スンバ県に存在する村落には多様性が認められるということである。筆者の主要な調査地はハハル郡である。ハハル郡はスンバ人が圧倒的な多数派を占め，その結果，住民の宗教構成は，土着宗教（「マラプ教」）かキリスト教の信者がほとんどである。それに対して，カムトゥック村にはサブ人のコミュニティも存在し，サブ人独自の文化も社会構造も村内には生き続けている。さらに，驚くべきことに，カムトゥック村には，イスラームのモスクもマドラサ（小学校）も存在し，イスラーム風の名前をもったスンバ人がムスリムとしてのアイデンティティを強くもって，生活しているのである。ただし，個々のスンバ人がそれぞれ独自の宗教上の理由からイスラームに改宗したのではなく，「家」という親族集団を単位として集団改宗したのは，まさにスンバ社会における氏族とその下位単位である「家」のまとまりの強さを物語っている。

カムトゥック村とハハル郡の調査村との比較で興味深いのは，一見したところ，ハハル郡のほうがスンバの社会構造が強く残っているように考えられるが，氏族と「家」という公的領域と，家族／世帯という家内的領域の関係を考えると，カムトゥック村のほうが，公的領域の比重が大きい，つまり上で述べたような氏族と「家」という単位の団体性が存続していることである。この問題について，本稿で取り上げた世帯調査からは確かなことはいえないが，カムトゥック村では水田耕作を基盤とする経済力が強く，それと深く結びついているのが，カナタング氏族など貴族層の氏族と不可分な形で存在する，「奴隷」という労働力の存在である。カムトゥック村は貴族層を中心とする「伝統的な」ヒエラルキーが今日でも強く続いていることで有名だが［Twikromo 2008 参照］，そのような閉鎖的かつ非近代的な側面

と，ジャワからのイスラーム教徒の移民を受け入れる開放性が両立していることが，カムトゥック村の特徴である。この問題については，今後の調査のなかで，さらに深く考えていきたい。

参　考　文　献

Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011a, *Sumba Timur dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.

Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011b, *Haharu dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.

Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011c, *Pahunga Lodu dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.

Fox, J. J., 1977, *Harvest of the Palm: Ecological Change in Eastern Indonesia*, Cambridge: Harvard University Press.

Kapita, Oe. H., 1976a, *Sumba di dalam Jangkauan Jaman*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

————, 1976b, *Masyarakat Sumba dan Adat Istiadatnya*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

————, 1979, Lii Ndai: Rukuda da Kabihu dangu la Pahunga Lodu (Sejarah Suku-suku di Sumba Timur), Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

————, 1982, *Kamus Sumba/Kambera − Indonesia*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

小池誠，1998,『インドネシア――島々に織りこまれた歴史と文化』三修社。

————，2003,「ジャワ村落社会のテレビ視聴者――メディア人類学の試み」『国際文化論集』27: 23-52，桃山学院大学総合研究所。

————，2005,『東インドネシアの家社会――スンバの親族と儀礼』晃洋書房。

————，2010,「インドネシア・カラワンにおける日系工業団地進出と周辺農村社会に生きる家族の変容」『南方文化』37: 45-59。

————，2012,「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」『桃山学院大学総合研究所紀要』38-1: 27-48。

————，2013,「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性――『家族圏』再考」『比較家族史研究』27: 7-26。

Onvlee, L., 1984, *Kamberaas (Oost-Soembaas)-Nederlands woordenboek*, Dordrecht: Foris Publications Holland.

オンフレー，L，1987,「マンギリのダムについて――東スンバの社会構造に関する考察」宮崎恒二ほか編訳,『オランダ構造人類学』せりか書房。

清水昭俊，1987,『家・身体・社会』弘文堂。

Twikromo, Y. Argo, 2008, *The Local Elite and the Appropriation of Modernity: A Case in East Sumba,* Indonesia, Ph D. Thesis, Universiteit Nijmegen.

Woha, Umbu Pura, 2008, *Sejarah Pemerintahan di Pulau Sumba (Kenangan 50 Pertama Provinsi NTT dan Kabupaten di Sumba)*, Kupang: Undana Press.

（2013年５月８日受理）

Households and their Economics in Rural Society of Pahunga Lodu, East Sumba Regency, Indonesia

KOIKE Makoto

The purpose of this paper is to report some results of the research project titled "The Anthropological Study of Kinship and Family in the Changing Rural Societies in Indonesia" which was funded by the Research Institute of St. Andrew's University. I conducted an anthropological fieldwork from August to September, 2011 in the village of Kamutuk (pseudonym), Pahunga Lodu subdistrict, East Sumba regency, Indonesia. Socio-cultural and economic data on one hundred households were acquired to elucidate the household economics of the villagers. These data are compared with those collected in two villages of Haharu subdistrict in 2010. Kamutuk contrasts sharply with the villages in Haharu in terms of ethnicity and agricultural development. The aim here is to better understand the differences in households and their economics between the two regions. Compared with the homogeneous villages in Haharu, Kamutuk is a rural society with diverse ethnicities and religions. Savunese Christians and Javanese Muslims live among the Sumbanese majority. Most members of Uma Andungu (House of Andungu) of the Sumbanese dominant clan (*kabihu*) were converted to Islam. This case depicts the strong unity of the house (*uma*) which has not been eradicated by the modernization prevailing in the nation-state of Indonesia. One household of this Muslim house is very rich in not only the agricultural fields and livestock but also modern consumer goods such as satellite dishes and motorbikes. Their remarkable wealth is supposed to originate from the manpower of "slaves" (*ata*) as well as the rice fields the family inherited from previous generations. An openness accepting the Javanese immigrants exists alongside the "traditional" hierarchy in Kamutuk.